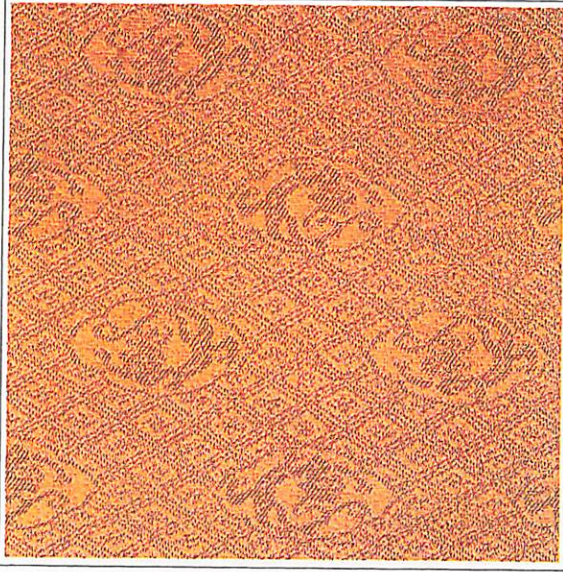


■地色 黄土 ■文様 菱繫ぎ・卍字・雨龍



## 細川緞子

ほそかわどんす

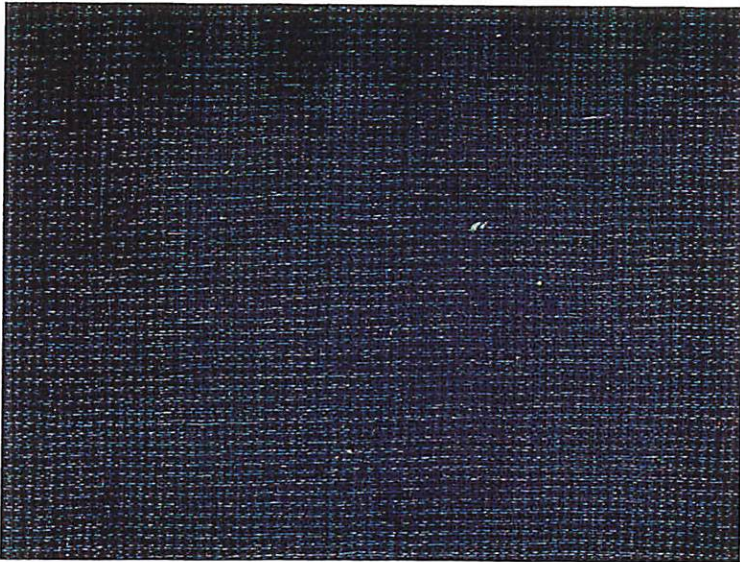
細川緞子と称するものはいくつかあり、この裂は綾杉折入菱繫の地文で、菱の中には卍字があり、龍文を中に織り出した木瓜杵の文様を配したものの。類裂としては柴山緞子や四聖坊緞子などがある。

169 紹鷗間道

じょうおうかんどう

武野紹鷗（一五〇二〜一五五五）愛用の裂で、紺地に細かい白糸で千鳥格子風に織り出している。東南アジア製かとも考えられるが判然としない。

紹鷗の色彩的嗜好は紺系の色調ではなかったろうか。しばしば紹鷗棗に添えられている紺色の木綿風の間道裂は、大名物「紹鷗茄子茶入」に添えられている紹鷗間道に近似している。白と紺の糸はともに利休間道に較べて糸も細く、撚りも強い。紹鷗茄子に付属する仕覆は織留の部分を使用したもので、同手色がわり裂による片身がわりの縫合わせになっている。



169 紹鷗間道

千宗旦 せんのそうたん

生没年 天正六年—万治元年(一五七八—一六五八)

八十一歳

職 種 茶匠

千家三世

出自 千少庵の子

称号 幼名修理 名宗旦 号元伯・元叔・咄々斎ちうぢうさい・咄斎・寒雲・隠翁 一字名旦

師事 千少庵 春屋宗園・玉室宗珀〔参禅〕

門下 藤村庸軒・杉木普斎・山田宗偏・三宅亡羊・久須美疎安・松尾宗二・初代飛米一閑・銭屋宗徳

事蹟 佗び茶を完成。千家中興の祖。十歳の頃、祖父利休の意により大徳寺に入り、春屋宗園に

喝食かくじきとして侍し、得度して蔵主に昇ったが、文禄三年(一五九四)頃帰家。慶長五年(一六〇〇)頃家督を継ぎ、少庵に後見されて利休遺跡を守る。正保三年(一六四六)、今日庵を建てて隠居。東福門院の恩遇を蒙る。

藤村庸軒 ふじむらようけん

生没年 慶長一八年—元禄二年(一六一三—一六九二)

八十七歳

職 種 茶匠 商家

庸軒流の祖 呉服商十二屋主人 伊勢津藩主藤堂侯の茶頭・御用商人

出自 久田宗栄の次男 久田宗利の弟 京都の呉服商十二屋藤村宗佐の養子 近江国の人

称号 幼名五郎八 名政直のち当直 通称十二屋源兵衛尉 号庸軒・反古庵・徹翁 俗称茶伯子屋号十二屋

師事 真翁紹智・小堀遠州・千宗旦〔茶〕 三宅亡羊〔儒学・香〕 山崎闇斎〔儒学〕 藍溪宗瑛〔参禅〕

門下 井野口宗休・近藤柳可・笹屋宗清・山本退庵・北村幽庵・横井不見・比喜多宗積〔茶〕

事蹟 親戚の宗旦(兄宗利の妻が宗旦の娘阿暮あぐさ)に参じて高弟となり、その四天王の一人。紹智・遠州に学んだ前半生の茶の湯遍歴と、亡羊や闇斎の学問的感化により、茶説・茶法にわたって利休茶の湯の発展をはかる。その漢学趣味を示す好み物「標有梅香合」「回也香合」などがある。茶室の遺構として「天然図画亭」「瀧看席(反古庵)」が有名。名物茶碗銘「閑居」「太郎坊」「桃花坊」、利休作豊公御物「打邊」の茶杓などを所持。自作や好みの茶道具も多い。読書を好み、詩文をよくし、享保三年(一七一八)、荻野道興編「庸軒詩集」がある。

備考 女婿久須美疎安が、庸軒の言行を記録して「茶話指月集」を著わす。

北村幽庵 きたむらゆうあん

生没年 慶安元年—享保四年(一六四八—一七一九)

七十二歳

職 種 茶人(庸軒流)

称号 名政従 通称佐太夫 号道遂・幽庵(祐庵・幽安とも) 俗称堅田幽庵

師事 藤村庸軒

門下 清水良慶

事蹟 茶室「天然図画亭」を庸軒と合作。料理の幽庵焼を創案。

備考 近江堅田に住す。一説に享年七十歳とも。庸軒の弟堅田退庵(山本宗謙)との区別が明確でない。

森川如春庵 (もりかわによしゅんあん)

明治二十年—昭和五十五年(一八八七—一九八〇)

富農、数寄者。愛知県一宮の人。名は勘一郎。

十五歳で尾州久田流の茶を習い、十六歳で本阿弥光悦の「時雨」を、十九歳で同じく「乙御前」を入手した。益田鈍翁・原三溪・高橋箴庵・田中親美らと親交し、佐竹本三十六歌仙絵の切断に立会い、柿本人麻呂を引き当てたのが有名。

岡谷惣助、高松定一らと敬和会を組織し、中京の数寄者の中心的存在となった。陶芸・書・画に長じ、中国・日本の古今の美術品を収集、また茶法書・茶会記などにも目を配った。その収集品の一部は昭和四十二・四十三の両年にわたって名古屋市に寄贈され、現在は名古屋市立博物館に収蔵されている。

伝来

宗旦

庸軒

幽庵

如春庵

此宗旦小棗宗旦

より清望シ年来

所持之を贈リよ也

天和辛酉十一月

冬至

北村公 庸軒

加とじ  
ひや

天和辛酉  
1681年

天和年間  
1681~1684

藤村庸軒 68歳  
1613~1699

北村幽庵 33歳  
1648~1719

仕服

紹鷗間道

紅地縫裂

細川鍛子

③鷺棗 利休好

桃山時代  
高さ六・〇cm 径六・一cm  
個人蔵

『千家中興名物記』の棗の筆頭に「一、鷺棗 利休居士好袋（中略）庸軒ニ伝リ京長崎屋忠七より鴉池道徳」との記載があり、『茶道箋蹄』にも鷺の名がみえるように、古くから話題にのぼり名物視されていた棗である。

本歌は利休から少庵、宗旦、宗拙、藤村庸軒、そして久須美疎安（一六三六一一七二八）に伝わった。本作は疎安が所持したときに写したものとと思われるが（插图12参照）、本歌の所在がわからないうち、古く写しとして貴重な作例である。

鷺棗の寸法は小棗の大きに属し、腰がとくにふっくらとつくられている（一七〇頁実測図参照）。なお鷺棗という名称は、鷺のようにひとつかみにできるほどの大きさの意とも、またこのうえに出るものはない、つまり他の鳥を見おろす鷺の意から出ているともいう。こうした棗で濃茶を練るのが、本来の千家の佗茶なのであろう。最後に『茶器名物図彙』の記載を引用しておく。

鷺棗之事

鷺棗ハ利休棗を好ミしはしめといふ、其後今之如くの大中小出来しとなり、大閤へ御覧に入候処、殊外御賞美被成候而、其袋切レを被下しとなり、箱桐、サン蓋に張紙にてわしと有り宗旦筆なり、盛阿弥作にて彫銘あり、是ハ秘蔵此上を見ぬとの事にて、わしと号、藤村庸軒久須見疎安伝来由緒書等あり、袋ハ蜀金にて東山殿御物、大閤より利休へ被下候キレなり、此手加賀利家公も拝領といふ今加州ニ有、当時替袋逢坂・宗薫緞子・鎌倉漢島三ツ有り、外に覚々齋棗雛形あり、右棗にて宗旦、有棗公を茶湯に招きて盆点にせられ候、有棗公棗の盆点めづらしと給ふ、宗旦其時、其所之草部屋肩衝上りも秘蔵なり、いかゞと挨拶せらるとなり、棗にての盆たてハ此鷺棗はしめなり